

書評 03

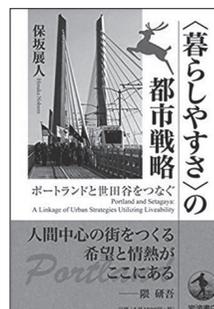
保坂展人 著

『〈暮らしやすさ〉の都市戦略

：ポートランドと世田谷をつなぐ』

岩波書店 / 2018 年 8 月刊 / 208 ページ / 1800 円 + 税
ISBN 978-4-000-22643-1

評者：名和 洋人
名城大学経済学部



本書は、アメリカ太平洋岸のオレゴン州ポートランド市に学んだ東京都の世田谷区長による街づくりの記録である。目次によれば全部で9個(章)のテーマを語る。ただ、数も多くこのままでは本書全体の像と構成を把握することは少々難しい。そこで、これらを3部に分割して読み進めることを最初に提案したい。独断ではあるが、1～5(章)を第一部「環境都市ポートランドから学ぶ街づくり」、6～7(章)を第二部「街づくりから人づくりへ」、8～9(章)を第三部「未来の街づくりへ向けた動き」として、以下、各章の内容を見ていこう。

まずは第一部である。「1 世田谷からポートランドを語る」において著者は、ポートランドの1960年代以来の街づくりに魅せられ、「地域や社会は必ず変えられる」と確信できるようになった、と主張する。すぐれたビジョンを備えた構想、丹念な工程表、利害関係の調整などに、長期にわたって時間と労力をかける意義を学んだと言う。コミュニティの運営や未来ビジョンを創造する自治主体、主権者としての市民への期待を語っている。「2 2015年、ポートランド訪問の機会はやってきた」は、ポートランドが1960年代の河川などの環境汚染を一步一步克服し、今や「環境都市」という評価を得るまでになったとする。あわせて、我が国の環境行政の進歩を示す。「3 ポートランドの街歩き」は、市街地のスプロール化を回避するうえで重要な都市成長限界線に言及する。緑地に近

く歩きやすいコンパクトな中心市街地の再生に不可欠とのことだ。その上で歴史的建築のリノベーション、将来の固定資産税上昇分を財源とする画期的な資金調達法、などへと話題をひろげている。「4 環境破壊に襲われた1970年代のポートランド」は、まずは都市の膨張を阻止できなかった我が国の過去を振り返る。さらにポートランドで高速道路撤去運動を実現した原動力が市民運動であったことを想起しつつ、「住民参加の街づくり」の意義を説く。そのうえで世田谷区の「無作為抽出型区民ワークショップ」の実践例を紹介していた。「5 ゆっくり歩くポートランド訪問」は、2度目の滞在時の記録(2016年8月)である。公共交通や自転車、歩行者を優先した街づくりの実情を明らかにするものだ。ファーマーズマーケット、アメリカ最大の日本庭園、バーニー・サンダース支持者の主張、などにも触れていた。

つぎに第二部である。「6 ポートランドで世田谷を語る」は、2017年4月の区長によるポートランドでの講演概要である。アメリカにはない介護保険制度を紹介したとのこと。施設入所よりも在宅支援を重視する近年のトレンドは無視できないという。他方で待機児童問題や児童虐待防止、面談による子育て支援なども紹介する。全国的にめずらしい「若者支援」として、児童養護施設出身者が大学進学時に必要とする住宅や奨学金の支援も話題としたそうである。オレゴン州連邦裁の「同性婚禁止は違憲」との

判決が2014年に出される中で「LGBT人権擁護」も取り上げた。日本で同性婚が認められない中、不動産賃貸借、携帯電話の「家族割引」適用、生命保険受取人としての承認、など区独自の支援は興味深い。「7 ポートランドに見る『子どもの虐待通告システム』」では、「通告窓口の一元化」と「情報共有」を実現した同市の「児童福祉ホットライン」を紹介している。現在、都の児童相談所と区の子ども支援センターが別々に運営される中で、将来的な一元化構想の先行例として、区長は注目したとのこと。福祉部門と捜査部門（検察官や警察官）との緊密な連携などに見るべき点が多いとのことだ。「街づくり」に加えて「人づくり」へとポートランドが更なる挑戦を続けていたことは印象的であった。

続いて第三部である。「8 世田谷とポートランドをつなぐ交流が始まった」は、「ポートランドと世田谷をつなぐ、暮らしやすさへの都市戦略」をテーマとした、2017年7月のシンポジウムを振り返っている。世田谷区の「みどり率」向上に長年尽力し、あわせてポートランドのグリーンインフラ政策を追い続けた涌井史郎氏は、都市基盤をアスファルトや下水、放水路等の人口構造物のみに頼らず、緑の持つ機能を積極的に使うべきと主張した。さらにポートランドの日本庭園、そこでの「自然との共生」理念からも学ぶべきという。さらに両自治体間の交流活動の紹介もあった。「9 下北沢の変化とポートランドに向かった人たち」は、小田急線地下化（2018年）後の下北沢の街づくりに向けた奮闘を描く。跡地利用、地域再開発、道路問題、さらに緑化の推進、防火防災まで課題は数多い。その際はポートランドの取り組み例を参考にすべき、とのことだ。

最後に、本書に関していくつかコメントしたい。第一に、本書の意義はとりわけ6～7（章）にあるように感じた。「人づくり」という次なる課題を示しているからである。子どもの虐待

防止、若者支援、高齢者福祉など、ポートランドと世田谷は相互に学びあうことができるし、実現可能なところも多い。第二に、ポートランドと世田谷を、行き来しながら叙述しているところであろう。日本とアメリカは共通点もあるものの、歴史や制度などに多大な相違がある。両者は都市規模も全く異なる。だからこそ、お互いに学びあうことも多いのではないだろうか。8～9（章）はこの点で面白かった。第三に、世田谷区が位置する世界最大の東京都市圏そのものを、一層議論しなければならないだろう。1億2千万超の人口、狭い国土、そのうえで経済効率を優先すれば、超巨大都市圏の成立も致し方なかろう。しかし非効率な欠陥も目に余るようになっている。著者も「痛勤地獄」を経験したそう。鉄道の地下化にも一定の効果はあろうが、結局は対症療法に見える。いずれにしても、ポートランドにおける都市成長限界線の設定は、こうした観点からも画期的である。第四に、本書は全体として構成や文章、あるいは情報の整理などで、改善の余地があるように思う。読みにくい部分も散見された。取り上げた論点については興味深いだけに残念だ。ポートランドの「街づくり」にならって、可能な範囲で時間と手間をかけた出版を希望したい。

世田谷区長は言う。「都市に向きあい、人間らしい温かい社会をめざす」なかで「ポートランドはよき座標軸となる」（171頁）と。すべての自治体にとって見るべき挑戦が、本書にはある。ポートランドの街づくりは長年注目を集めてきており文献も多い。より詳しく知りたい方は、本書をきっかけに深めてみてはどうか。未来を見据えた問題提起の書と思う。